

道綽における『觀經』理解

——觀音菩薩を中心として——

野村 淳 爾

はじめに

道綽の主著である『安樂集』が『仏説觀無量壽經』（以下『觀經』）の注釈書と捉えられていることは、すでに多くの先行研究にて示されている。⁽¹⁾そして、觀音菩薩に関して、先行研究では『觀音授記經』説示の觀音菩薩を道綽の思想と対比して論じているものはあるが、『觀經』説示の觀音菩薩について道綽の思想に関連づけて言及しているものはない。小論においては『觀經』説示の觀音菩薩が『安樂集』に受容されているという可能性を提示したい。

一 『觀經』における觀音菩薩の解釈

『觀經』の説示において、觀音菩薩を捉える際、「①、觀法」「②、菩薩の救済」「③、九品往生」の三通りに大別できる。

① 觀法の対象としての觀音菩薩

第十觀音觀において觀音菩薩という有相に対する觀法が説

かれている。その第十觀音觀において、

仏告阿難及韋提希。見無量壽仏了了分明已。次復応觀觀世音菩薩。此菩薩身長八十萬億那由他由旬。（中略）仏告阿難。若有欲觀觀世音菩薩者当作是觀。（大正一二・三四三c）

と説かれている。「まさに觀世音菩薩を觀ずべし」「まさにこの觀をなすべし」と、菩薩の有相を觀することが説かれ、明らかに觀法の内容を述べていることがわかる。

② 觀音菩薩の救済

第九真身觀・十觀音觀において、觀音菩薩による衆生救済の構造が説かれている。それは『觀經』の第九真身觀において

仏心者大慈悲。是以無縁慈摂諸衆生（大正一二・三四三c）

と説かれ、仏心が慈悲であることを表している。そして、無縁の慈、大慈悲により衆生救済をはかるという前提のうえに、次の觀音觀においては「化仏」「化菩薩」「變現自在」「接引衆生」などの文言が見られるように、行者が仏心である「大

悲」より「化」として現された観音菩薩の相を観ずることに
より罪が消滅していくことがわかる。「大悲」という用きを
化菩薩という相をもって現しているのである。

つまり、観音観においては観音菩薩が「大悲」のはたらき
の具体相として説示されていると考えられる。

③九品往生に関する観音菩薩

九品往生を説く後三観において、「かの国に往生す」「かの
国の七宝の池の中に生ず」と説かれるように、散善の実践の
結果により阿弥陀仏の世界に行くことが説かれる箇所であ
る。そのため、「観世音・大勢至」の来迎によって行者を阿
弥陀仏の国に迎え入れるという構図が多く見られる。

つまり、九品往生について説いている箇所では、来迎とい
う有相として観音菩薩が説かれていることがわかる。

すなわち、①から③までまとめると、『観経』における観
音菩薩は「①、観法の対象としての有相の菩薩」、「②、衆生
救済の有相の菩薩」、「③、臨終来迎における有相の菩薩」と
して説かれていることがわかる。すべての箇所で観音菩薩を
有相と捉えることができるだろう。

二 『安楽集』における有相の見方

①道綽の有相無相についての理解

道綽の有相理解について二つの捉え方がある。一つ目は次

の二文から窺える。

問曰。弥陀淨国既云位該上下無間凡聖皆通往者。未知唯修無相得
生。為当凡夫有相亦得生也。答曰。凡夫智淺。多依相求。決得往
生然以相善力微但生相土。唯觀報化仏也。(大正四七・六c)・・・
用例(一)

一切諸仏説法要具二緣。一依法性実理。二須順其二諦。彼計大乘
無念但依法性。然謗無緣求。即是不順二諦。(大正四七・八b)・・・
用例(二)

この二文は「凡聖通往」において凡夫は智が浅くて、その
ほとんどは有相の善を行ずることによって往生を願うのであ
るが、この有相でも必ず往生することが可能であると説く文
と西方の浄土を願生するということは相を取ることにとらわ
れて煩惱を増すものであるという異見のものの批判に対して
相を取ることは往生の妨げにはならないと説く第二大門の二
諦の文である。

この二つの文は有相による往生について述べている。用例
(一)では有相を観ずるという行法を説いており、具体的
な善根、行を有相として観ずることを説いていると考えられる。
つまり、その有相の内容について、「凡聖通往」の文のあと
に『観仏三昧経』の文

子在母胎時。母以敬信故。預為其子受三歸依。子既生已。年至八
歳。父母請仏於家供養。童子見仏。為仏作礼。敬仏心重。」(大正
四七・六c) (傍線部筆者)

を引用している。この引文により、「凡聖通往」の文では「有相善」の有相の内容を礼仏、念仏、観仏と示されていると考えられ、具体的な善根を有相として修することを意味していると考えられる。さらには用例(二)において、凡夫は相を縁として浄土往生すべきであると勧めていることもわかる。

二つ目は第二大門の「愛見大悲」の文と第一大門の広略相入の文から見てとれる。

菩薩行法功用有二。何者。一証空惠般若。二具大悲。一以修空慧般若力故。雖入六道生死。不為塵染所繫。二以大悲念衆生故。不住涅槃。菩薩雖處二諦。常能妙捨有無。取捨得中不違大道理也。(大正四七・八c)・・・用例(三)

菩薩若不知広略相入。則不能自利利他。無為法身者。即法性身也。法性寂滅故。即法身無相也。法身無相故。則能無不相。是故相好莊嚴即是法身也。(大正四七・七a)・・・用例(四)

この二文は菩薩は般若を修して、大悲をもって衆生救済のためににはたらいっているので、浄土往生を願うことは執着にはならないと述べている文と道綽が引用した曇鸞の「広略相入」の文である。用例(三)(四)からは菩薩は般若を修して、大悲をもって衆生救済のために有相を用いていることと菩薩による救いが読み取れる。

つまり、凡夫は相を離れ自ら相好を思うことにより往生できる上輩のものとは違い、あくまで有相をとることで往生ができるのである。『安樂集』の説示では菩薩という相をもつ

て衆生救済の構造を顕していると言える。すなわち、広略相入の論理、無相有相の論理に基づいて、真如法性より現れた有相の菩薩による衆生の救済が語られているのである。

以上、道綽の有相理解について二つに大別したが、用例(二)(三)では凡夫は相を観じてのみ往生が可能であることを示している。道綽は観法の具体的な相を観ずるものとして有相を理解し、観法ということの問題にしていると考えられる。用例(三)(四)では菩薩の救済法が示されていると解することができ。道綽において有相による救い、特に、有相の菩薩による救済が肯定的に捉えられている。

②『安樂集』における来迎

第五大門において『観経』に依って

九品之内皆言。臨終正念即得往生。(大正四七・一六c)(傍線部筆者)

と示しているように、道綽は『観経』の九品すべてには説かれていない「臨終正念」を九品の内それぞれに「臨終正念」の意があるものと独自に捉えていること(2)を考えると、『観経』を捉える上では、道綽は「臨終」を強く意識していることがわかる。

さらに、臨終における来迎について第十一大門において道綽は自分自身の言葉として次のように言及している。

若能生信帰向浄土。策意専精。命欲終時。阿弥陀仏与観音聖衆光

台迎接行者。(大正四七・二一a)

阿弥陀仏に関する言及箇所ではあるが、自らの言葉をもって臨終来迎を説かれていることは、「観音菩薩」について積極的な意味を含むと言える。つまり、道綽はこの末法世の衆生にとって有相をとることが必要と捉え、特に臨終における来迎について観音菩薩という有相を考えていたことを窺い知ることができる。道綽は観音・勢至観の文を直接引用していないが、臨終における来迎の相としての観音菩薩を『観経』の説示から意識していたと考えられる。

まとめ

以上のように、『観経』に説かれている観音菩薩について三つに大別できる。一つ目は観法の対象として説かれている観音菩薩、二つ目は救済の菩薩として説かれている観音菩薩、三つ目は九品往生の臨終来迎に説かれている観音菩薩である。その三種類の見方が道綽の有相理解についての見方と同じ構成である。つまり、有相を観ずることや有相の菩薩の救済について示されていること、また道綽自身の言葉として臨終来迎における観音菩薩が説示されていることが『観経』における観音菩薩の説示方法と同様であることがわかる。

すなわち、道綽が『観経』に説かれる観音菩薩について肯定的に捉え、受容していると考えることができる。道綽にとつ

て観音菩薩をもって『安樂集』を『観経』の経説としているという一つの視点を見出すことができるのではないだろうか。

- 1 山本仏骨氏が『安樂集』は『観経』の要義を釈したものであることを示されている。(『道綽教学の研究』1959年)
- 2 柴田泰山『安樂集』における『観経』理解参照
- 3 『観音授記経』において、臨終来迎を説く箇所は見当たらず、すでに「如幻三昧」を体得した観音が阿弥陀仏の滅後に順次如来になることが説かれている。

〈キーワード〉 道綽、『観経』、観音菩薩

(龍谷大学大学院)